

読まねか

クリスマス会がありました

12月15日に毎年恒例のクリスマス会をおこないました。
 今年は、ALTのステファニーさんとヘレンさんにご協力いただいて、外国の子供たちがクリスマスにする“PASS the PARCEL”(プレゼントまわせ)というゲームをしました。
 また、影絵サークルのかげぼうしさんには、「ゼラルダと人喰い鬼」を演じていただきました。シルエットで何かを当てるお楽しみもあり、盛り上がりました。
 他にも、ボランティアの方々にご協力いただき、すてきなクリスマス会となりました。

思わずくぎ付け デコパージュ

町内にお住まいの方が製作されたデコパージュ作品を、館内に4点展示しています。
 作品は、カウンター、掲示板前、雑誌コーナーに展示してありますのでご覧ください。
 作品は様々な形のものがあ、感動を与えてくれます。
 新しい作品や、季節に合った作品など入れ替わり展示していきますので、今後もご期待ください。

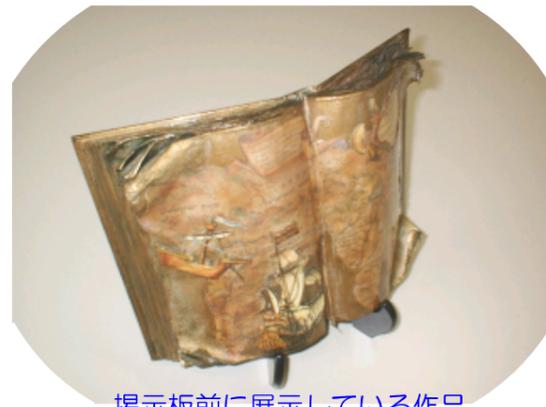
・・・デコパージュとは・・・

フランス語の古語が語源で、「切り抜く」「切り裂く」などという意味です。
 紙に描かれた模様や絵の切抜きを貼って物の表面を飾り、コーティング剤を塗り重ねていく工芸です。
 16～17世紀に日本の漆塗りに憧れたヴェニス家具職人が家具に装飾を施したのが始まりで18世紀中頃、ヨーロッパで広まり、フランス上流階級の婦人の間で流行しました。
 20世紀に入ってからは、アメリカで男女に関係なく手軽に楽しめるホビーとして大流行し、日本でも人気が出てきたものです。

おはなしのへやスペシャル

2月23日(土)の午後3時から、おはなしのへやスペシャルを行います。
 これは平成19年度の親と子の読書活動普及事業の一環で、講師に島根県立図書館の読書普及指導員の江角宏子氏をお迎えしたおはなし会です。
 4歳から11歳くらいまでのお子様を対象とした、おはなし会です。
 参加料は無料ですので、いつもとはちょっと違うおはなし会に、ぜひご参加ください。

詳しくはチラシなどでお知らせいたします



掲示板前に展示している作品

お手伝い助かっています

定年退職を迎えた方が、平日の4日間お手伝いに来てくださっています。
 主に、新聞に掲載されている隠岐関係の記事の切り抜きなどをしてもらっていますが、本の装備や電話帳の入れ替えなどの作業もしていただくこともあり、とても助かっています。
 お手伝いのおかげで、職員も少し負担を減らすことができ、余力を他のサービスに回すことができているのではないかと思います。
 いつもありがとうございます。

・・・今の特集・・・

『かわいいペットたち』
 あなたが好きな動物は何ですか? 『ねこ鍋』に『ハートくん』など写真を見ているだけで、心を癒されます。
 写真集からしつけの仕方まで、ペットに関する様々な本を紹介しています。

・・・こんげつのえほん・・・

『20年以上読み継がれている絵本』
 今月は、長く読み継がれている絵本の紹介をしています。子どもの頃に読んだことのある絵本や、好きだった絵本があるかもしれません。
 思い出を語りながら、お子様と楽しんでみてはいかがでしょうか?

12月利用状況報告

	入館者数	貸出人数	貸出冊数	登録者数
19年度	4,869	1,537	6,407	31
18年度	4,835	1,414	6,209	25
比較	34	123	202	6

12月によく読まれた本の紹介

皇室へのソボクなギモン
 辛酸なめ子・竹田恒泰/著 扶桑社

皇室の方はジャージを着て外出するの? 皇族の方は名刺を持っているの? 宮中祭祀とは? など、素朴なギモンを辛酸なめ子が明治天皇の玄孫、旧皇族、旧竹田宮の竹田恒泰を質問攻めにする。

摂氏零度の少女
 新堂 冬樹/著 幻冬舎

名門進学校で一流大学医学部合格の太鼓判を押されている桂木涼子がある日始めた“悪魔の実験”。それは最愛の母親に劇薬タリウムを飲ませることだった。善悪とは何を基準に決めるのか?

藩医宮坂涼庵
 和田 はつこ/著 新日本出版社

東北の貧しい小藩。病に利き、飢饉の時に役立つという山野草の普及の腐心する涼庵。しかし、人々の尊い命が何者かに翻弄されていく。次々おきる謎の真相は...。ミステック時代小説。

ア・ソング・フォー・ユー
 柴田 よしき/著 実業之日本社

無認可保育園の園長兼私立探偵、花咲慎一郎シリーズ。「ブルーライト・ヨコハマ」「アカシアの雨」など懐かしい歌謡曲の響きになぞらえた四つの物語。連ミステリーの傑作。

女性の品格
 坂東 眞理子 PHP新書

いまや女性の社会進出、活躍が当たり前となった日本社会。女性上位の時代だからこそ、従来の男性とは異なる価値観、よき女性らしさを職場や家庭に持ち込んでほしい。

図書館職員
オススメの一冊

『河童』／芥川龍之介 講談社

(日本現代文学全集56 芥川龍之介集より)

今月は佐藤が
紹介します

さて、古典文学を題材にした作品を書いた森鷗外、夏目漱石などに並ぶ明治生まれの作家といえば誰でしょう。答えは、芥川龍之介です。

芥川龍之介の作品で今回、私がオススメするのは隠岐にもおなじみの生き物「河童」がでてくる晩年の作品『河童』です。

物語は「どうかKappaと発音して下さい。」と始まります。精神病患者の青年が語るお話です。青年が登山にいったときに出会った一匹の河童。その河童を追った彼は意識を失い気が付くと河童の世界に迷い込んでしまいました。そのまま、河童の国で客人として暮らし始めた彼は、出産や芸術に対する葛藤、家族問題など人間と相変わらない河童たちの様々な苦しみを目にします。

なんとも人間っぽい河童達に親しみを感じるとともに、芥川は河童に例えられた人間のもつ悩みを描いたのではないかと。とも思える作品です。

難しいのは昔の言葉で書いてあることです。漢字も旧漢字になっていますのでご注意を。